

ナッジ×一石〇鳥！

九州大学大学院法学研究院教授 嶋田暁文

「プラットフォームの活動で誰もが幸せになる地域共生社会へ」というのは、素晴らしい理念・方向性である。しかし、“テーマに応じた PT を形成し、課題を共有した上で、「解決方法の協議と確定」と「実施戦略の策定」を行い、住民の役割周知と実践者の組織化を図る”という取り組みが仮にうまくいったとしても、“そこにどれだけ多くの人々を巻き込むことができるのか？あるいは、関わる人々をどうすれば広げていけるのか？”という点に、なお課題が残らざるを得ない。本稿は、この点についての提言にほかならない。

結論から言うと、「ナッジ (nudge)」と「一石〇鳥」の発想を組み合わせることがポイントになると考えている。「ナッジ」とは、行動経済学の用語であり、「選択を禁じることも、経済的なインセンティブを大きく変えることもなく、人々の行動を予測可能な形で変える選択アーキテクチャーのあらゆる要素」のことを指す。言い換えれば、人々の行動を“無意識的に”変容させるものであり、規制や経済的インセンティブとは異なる「第三の行動変容の仕掛け」と言い得る。一方、「一石〇鳥」とは、「一石二鳥」の「二」の部分に「三」「四」…といった具合に増やしていくことを指す。

抽象的に語ってもよく分からないと思うので、具体例を示そう。大分県由布市奥江地区の取り組み事例である。

同地区は、世帯数 18 戸、人口 41 人、高齢化率 65.9%の小規模集落であった（2011 年現在）。大分県中部振興局では、2009 年度の「小規模集落・里のくらし支援事業」などにより、「奥江ふれあいヤギの会」に対してヤギの購入、ヤギ小屋の整備などに関して支援した。地域の有志は、「ヤギの餌を集める」と称して、毎日のように、地区内の独居高齢者（女性が多い）の自宅を回り、声掛けをし、食材の余った野菜くずを集めて回る。実は、これは「見守り」の一環である。野菜くずを集めるのはその口実にすぎない。

面白いことに、野菜くずを提供している高齢者たちは、自分が提供している野菜くずを食べているということで、そのヤギに対して愛着を持ち、ヤギ小屋の周りに集まってくるようになった。「野菜くずを提供している」という貢献意識が「ナッジ」として機能し、これまであまり外出をしようとしなかった高齢者たちの足が、自然と「居場所」（ヤギ小屋の周り）に向かうことになったのである。

この取り組みの意義は、これだけにとどまらない。ヤギは、草を食べてくれる。家の周りの草取りが大変な高齢者にとって、ヤギが来てくれるのはとても助かる。また、ヤギの排泄物は堆肥となって、農業に活用される。ちなみに、ヤギには、イノシシ等の獣が警戒し、里に

近づきにくくなるという獣害防止効果もあるという。さらに、(これは残念ながら地域の高齢者に余力やノウハウがなかったため実現しなかったが) ヤギの乳を活用したチーズなどの特産品づくりも、将来的な可能性として構想されていた。このように、いろいろな効果を狙っていくのが、「一石〇鳥」の戦略なのである。

これをさらに応用するならば、たとえば、ヤギを地域の小学校・中学校あるいは障がい者施設で飼ってもらい、子どもたちや障がい者の方々に高齢者の見守り等に加わってもらうということも考えられる。障がい者施設が関われば、奥江地区では実現できなかったチーズなどの特産品づくりも可能になるかもしれない。

もっとも、ヤギというのは、相当な田舎でしか飼えない。都市部で、これらの発想を生かすにはどうしたらよいのか？

ヒントになるのは、佐賀県伊万里市の地域通貨「ハッチー」の取り組みである。これは、①事務局が生ゴミ回収のときに家庭や飲食店にハッチーを支払う、②事務局はその生ゴミを用いて堆肥をつくる、③農家はその堆肥をハッチーで購入し、その堆肥を用いて有機野菜を作る、④家庭や飲食店はハッチーを用いて有機野菜を購入する、といった具合にグルグル循環する仕組みである。これならば、都市部であっても、農村部と比較的近づけば実現できる。(なお、生ゴミ回収ではなく、「生ゴミコンポストバック」を活用することも考えられる。)

求められるのは、「ナッジ×一石〇鳥」でこれをより発展させていくことである。まず、福祉の見守りにつなげることは難しくないだろう。また、生ゴミを出してもらっている高齢者に有機野菜を作っている農家のお手伝いに行ってもらう仕掛けをつくることも考えられる。「自分が出した生ゴミが堆肥となって使われている」という貢献意識が「ナッジ」として機能することで関わりのハードルが下がり、農作業への参加が実現すれば、お年寄りの健康につながる。まさに、「一石〇鳥」である。

こうした発想でより多くの人々を巻き込み、その輪を広げるとともに、効果を倍増させること。それこそがいま求められている。